

論文

大学生の位置情報共有アプリ利用と対人関係

——信頼関係に基づく相互監視——

山下 まはろ 岸波 夏星 中村 雅子

本研究では位置情報共有アプリ「whoo」の利用実態および日常生活や人間関係にもたらす影響について検討した。利用経験のある大学生10名（男性6名，女性4名）に半構造化インタビューを実施した結果，利用者は必ずしもプライバシーやリスク意識が低いというわけではなく，信頼できる相手を厳選することでリスクを低減しようとしていた。友人とは利便性や話題作り，恋人とは安心感と関係の維持と，相手との関係による使い分けが見られた。先行研究でも指摘された，位置情報から相手の生活リズムや移動状況を先読みして行動する「配慮の高度化」も確認されたが，そのような「見る側」としての行動変化について無自覚な場合が多かった。一方，「見られている側」としては，その可能性を踏まえて意識して行動を変える事例も多数報告され，相互監視という中でも見る一見られる関係に非対称的な面があることが示唆された。監視が文化として日常化した現代において，利用者はアプリの相互監視的な側面を否定的に捉えるのではなく，信頼関係を基盤としたつながりの維持やコミュニケーションの効率化の手段として受容していることが明らかになった。

キーワード：位置情報共有アプリ，相互監視，配慮の高度化，信頼，プライバシー意識

1. 問題意識

1.1 位置情報共有アプリ利用への素朴な疑問

近年，若者の間で位置情報共有アプリの利用が広がっている。共有相手の居場所を常に把握できるという点で利便性が高く，友人や恋人との待ち合わせを効率化するだけでなく，日常生活における安心感や繋がり維持にも役立つとされる。しかし，大学生である筆者の岸波，山下にとっては「監視されているようで怖い」「プライバシーが気になる」という印象を持ち，利用者はなぜ使うのかという素朴な疑問が生じた。

この問いは，単なる個人的な印象ではなく，社会の中で実際に起きている出来事とも関係している。例えば，北九州で発生した母娘刺傷事件では，位置情報共有が犯行の背景にあった可能性が指摘されている^(注1)。また，子ども見守り用GPSが悪用され，通勤・帰宅状況が知らぬ間に追跡されていたストーカー事件も報告されている^(注2)。これらの事例から分かるように，利便性の裏側には監視やプライバシー侵害のリスクが潜んでいる。

それにも関わらず，多くの大学生は位置情報共有アプリを積極的に利用している。しかし，大学生の位置情報

共有アプリの利用実態や背景についての研究はまだ少ない。そこで本研究では，アプリの利用経験がある大学生を対象に，位置情報共有の利用実態や人間関係，日常生活に与える影響を明らかにする。

1.2 位置情報共有アプリとは

位置情報共有アプリとは，GPS機能が付いたSNSであり，共有相手の位置情報を常時共有するという特性を持っている。これは，お互いに承認した相手の現在地を，地図上でリアルタイムで見ることができるものである。今回調査対象とした「whoo」には，先行する位置情報共有アプリ「Zenly」があるが，これについて研究した[荒井]も，位置情報共有アプリを「お互いに承認した相手の現在地を，地図上でリアルタイムで見ることができるもの（[荒井]，p.24）」と定義している。

「whoo」は2023年2月の「Zenly」のサービス終了を受け，その代替として急速に普及したアプリであり，共有相手の地図上の現在地だけでなく，移動状況や滞在時間，電池残量の把握など「Zenly」と同様の機能も多く継承している。2025年9月現在で累計ダウンロード数は3,000万に達し^(注3)，利用ユーザーを急速に伸ばしている。現在，利用可能な位置情報共有アプリには，他にも「MixerBox」「Jagat」「きっかけマップ」「GHOST」などがあるが，これらと比較しても突出したダウンロード数となっている。

YAMASHITA Maharo, KISHINAMI Kaho
 東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科
 2025年度卒業生
 NAKAMURA Masako
 東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科教授

2. 関連する先行研究

2.1 現代社会における監視の日常化

現代社会において、監視は特定の権力による特別な行為ではなく、人々の生活に溶け込んだ日常的な「文化」となっている。この変化を理解するためには、古典的な監視と現代的な監視の両方を知ることが重要である。

古典的な監視についての考察としては、フーコー(1975=1977)が『監獄の誕生』で論じたパノプティコンがある。取り上げられている監獄のモデルは、中央の監視塔から放射状に配置された監房の囚人が、常に見られている可能性があるという構造を持つ。重要な点は、囚人からは看守の姿が見えないことである。この構造は、囚人に「常に見られているかもしれない」という意識を生み出し、実際には監視されていなくても自発的に規律を守らせる効果を生み出した。フーコーは、この監視と訓練の仕組みが、監獄だけでなく、学校、工場、病院といった近代社会のあらゆる施設に浸透していると論じた。

この古典的な、権力者から一般市民への「上からの監視」に加え、現代社会では新たな監視が現れた。ライアン(2018=2019)は現代の監視はもはや私たちの生活の一部、すなわち「文化」になっていると指摘する。現代の監視は、特定の施設にとどまらず、スマートフォン、インターネット、SNSといった目に見えない技術を通じて日常の中に溶け込んでいる。

この変化は、監視の主体が権力者側だけでなく、一般市民同士の相互監視へと拡大したことが大きく影響している。私たちは誰かに命令されたわけではないにもかかわらず、SNSや位置情報共有アプリを用いて、自発的に、あるいは無自覚にお互いの行動を可視化し合っている。現代における監視の利用者は、利便性と引き換えに、自ら進んで監視されること、すなわちデータの提供を受け入れている。またこれは、権力側の監視がなくなったというわけではなく、私たちがスマートフォンなどを通じて、無意識に監視に参加する時代になっているのである。

これを本研究の対象である「whoo」に当てはめると、友人同士で位置情報を共有する行為は、まさにライアンの指摘する「市民同士の相互監視」そのものではないだろうか。また、「アプリを開けばいつでも相手の場所が見える」「相手からも見られているかもしれない」という状況は、パノプティコン的な「不可視の監視」の構造と類似しており、それが規律、つまり相手への配慮や自己の行動の調整を生み出していると考えられる。

2.2 位置情報の常時共有と配慮の高度化

大学生の位置情報共有アプリ利用の実態や背景についての研究はまだ少ないが、その中でも[荒井]は、「Zenly」ユーザーの大学生を対象に、位置情報の常時共有が生み出す行動変化や配慮のあり方を明らかにしている。

そこでは、ユーザーがアプリの情報をそのまま受け入れるだけでなく、相手にどのように見えるかを意識して行動を調整する様子が示されている。常時共有される位置情報をもとに、相手が返信しづらい状況にあると判断して連絡を控える、相手を誘おうとした際に、共有相手が断りづらい状況にいることに気づいて誘う行為自体を取りやめるなど、高度な配慮が、日常の中で働いていることも報告されている。

さらに、位置情報の常時可視化は、ユーザー自身の行動にも影響を与える。スピード違反を避けたり、コロナ禍において周囲の目を意識して外出を控えたりと、自らの行動を社会的規範に沿う方向に律する傾向が観察された。位置情報共有アプリでは、通常のSNSのような主体的な情報提示・情報操作が難しいため、仲間内の規範に合わせざるを得なくなる状況が示唆されている。

本研究はこの知見を踏まえ、現在大学生に広く利用されている「whoo」においてもこのような行動調整や高度な配慮が生じているのかを明らかにする。

2.3 アーキテクチャとしてのメディア

[濱野]は、「mixi」「2ちゃんねる」「ニコニコ動画」のような2000年代の代表的なウェブサービスを対象に、メディアの「アーキテクチャ」が利用者の行動をどのように方向づけているのかを論じている。アーキテクチャとは、禁止や命令のような明示的な規範ではなく、サービスの設計そのものによってユーザーの行動を誘導する枠組みを指す。

たとえば「2ちゃんねる」は匿名性、スレッド構造、書き込みの即時性、ログの流れの早さといったアーキテクチャを持つ。これらの設計が、利用者に「発言責任を感じにくい」「気軽に書き込む」「他者を攻撃しやすい」といった行動を生み出したと指摘している。利用者自身が「匿名だから攻撃しよう」と必ずしも意図的に考えていなくとも、匿名性という環境自体が行動を方向づけるとしている。

位置情報共有アプリ「whoo」においても、特有のアーキテクチャが上記のようなユーザーの行動や関係性を形成していると考えられる。「whoo」では、相手の位置を地図上に常時可視化する設計、滞在時間の表示、移動中のアイコンの動きや速度の可視化、フリーズモード^(注4)の存在など、複数の情報がリアルタイムに提示されるアーキテクチャを持つ。これらの設計によって、ユーザーは意識的に「監視しよう」と思わずとも、位置情報を確認し、状況を推測し、それに応じて自身の行動を調整するという流れが生み出される。このように、「whoo」のアーキテクチャは、日常的なコミュニケーションや行動判断に影響を与え、ユーザーの行動を無意識のうちに方向づける力を持っていると考えられる。

3. 目的

3.1 研究の目的

本研究では位置情報共有アプリ「who」に注目した。本アプリは利便性が評価される一方で、「監視されているような感覚」や「プライバシーの懸念」、あるいはストーカー被害のリスクといった負の側面も指摘されている。しかし、こうした懸念がありながらも、多くの大学生が利用を継続している事実がある。そこで「大学生は、このようなリスクがある位置情報共有アプリを、どのような関係性や状況で、肯定的に使っているのか？」という問いを設定した。

利用経験者へのインタビュー調査を通じて、大学生が「who」のリスクをどのように認識し、位置情報共有が日常生活や人間関係にどのような影響をもたらしているのかを明らかにすることを目的とする。

3.2 検証課題

先行研究や問題意識をもとにインタビューのガイドとなる検証課題を設定した。

(1) プライバシー意識と利用意識、行動の関連

[佐藤・太幡] は、SNS利用者を対象に、プライバシー意識の違いが利用行動や被害経験にどのような影響を及ぼすかを検討している。佐藤らによれば、自伝的情報や属性情報といった個人情報に対するプライバシー意識が低い群ほど、他者とのコミュニケーションを積極的に行う傾向があるとされる。こうした知見を踏まえ、「who」利用者においても、相対的にプライバシー意識が低い者ほど、位置情報などの個人情報の共有に対する抵抗がなく、他者と積極的に繋がろうとする傾向があるのではないかと予想した。

(2) 利用による感情や対人関係の変化

位置情報共有アプリの利用は、単に待ち合わせの利便性を高めたり、つながりを維持したりするための手段にとどまらない。位置情報共有を行うことで、繋がっている相手への感情や対人関係にも深い影響を及ぼすのではないかと。位置情報の常時共有は、心理状態（気持ち）や日常的な振る舞い（行動）、さらには共有している者との距離感や関わり方（対人関係）にも影響を及ぼす可能性があるのではないかと考えた。

(3) 配慮の高度化の検証

[荒井] は、位置情報が常時共有される環境において、ユーザーが他者の状況を把握して積極的に連絡を取ったり、逆にあえて連絡や誘いを控えるなど、相手に配慮した行動調整を行うようになることを「配慮の高度化」と表現した。このような「配慮の高度化」が、「who」においても確認されるのかを検証する。「who」を通じて、共有相手の居場所が分かった時、それに応じて自

身の行動やコミュニケーションをどのように調整しているのかに着目する。

(4) 利便性と娯楽性のバランス

「who」には相互のコミュニケーションに役立つという「利便性」と仲間とアプリを楽しむという「娯楽性」がともに提供されていると考えられる。

しかしその中でも「利便性」を重視する者は、日常生活の効率化や安心感を求めていると考えられる。具体的には、待ち合わせ時の位置確認によるスムーズな合流や、家族・恋人の安否確認といった、実用的なツールとしての側面を強く意識していると予想される。

一方で、「娯楽性」を重視する者については、位置情報を一種のエンターテインメントとして消費していると推測される。彼らにとってアプリは、友人の現在地を会話のきっかけ（ネタ）にし、誰がどこで何をしているのかを観察して楽しんだりするための、コミュニケーションツールとしての利用が強いと予想した。

(5) 個人の性格特性との関連

個人の性格特性との関連では、新しいものに関心が高い学生ほど、「who」でも、自発的に利用を始めた、周囲に勧めたりする傾向があるのではないかと考えられる。また承認欲求や自己開示の傾向が強い者ほど、位置情報共有アプリにおいても、他者との繋がりや他者からの支持を求める可能性があると考えられる。[渡邊] は SNS 利用における心理的な要因を分析し、「SNS 上で自己開示を多く行う人は、対面でも自己開示を多く行う傾向がある」と述べている。つまり、他者とのコミュニケーションを求めている人は、対面やインターネットといった手段に関係なく、積極的に交流を行おうとする傾向があるのではないかと考える。これらの性格特性と利用行動の関連についても検討した。

4. 研究方法

本研究では、大学生の位置情報共有アプリの利用実態や、利用に伴う心理的・行動的な変化を質的に捉えるため半構造化インタビュー調査を実施した。調査は状況に合わせて、対面またはオンライン（Zoom）で実施することとした。

調査対象者は、位置情報共有アプリ「who」の利用経験がある大学生とした。現在は利用を中止していたり、何度か入れ直したりしていても、過去の利用経験や止めるに至った経緯も重要なデータになると判断し、対象者に含めた。対象者の選定にあたっては性別のバランスを考慮し、男女合わせて10名程度を目標とした。

主な質問は、インタビュー協力者の所属、学年、性別、恋愛関係にある相手の有無などの属性情報、および「who」や先行する「Zenly」の利用歴、利用頻度や位置情報の共有相手の人数、相手との関係などの利用実態

についての基本情報、実際の利用の仕方やエピソード、利用による感情や行動、対人関係の変化、性格特性に関わる質問 などである。

5. 結果と考察

5. 1 調査の概要

インタビュー調査の調査期間は2025年6月30日から10月22日である。調査は対面およびオンライン (Zoom) を用いて行い、1人あたりのインタビュー時間は25分から73分であった。協力者は合計10名の大学生で、内訳は男性6名、女性4名である。協力者の「whoo」利用期間は、最短で2週間、最長で2年半と幅広く、対象者のうち6名は「Zenly」など過去に他の位置情報共有アプリを利用した経験を持っていた。なお、インタビュー内容は協力者の許可を得て全て録音して逐語録を作成し分析に用いた。

5. 2 「whoo」の利用実態

インタビューを通して、「whoo」は日常生活の中で多様な場面において利用されていることが分かった。特に、待ち合わせや移動状況の把握といった日常的な場面で頻繁に用いられている。例えば、友人同士で集まる際には、集合時間を厳密に決めるのではなく、位置情報を見ながら待ち合わせをする使い方がみられた。

近くの友達と集まると結構適当な集合時間にして、16時集合ねつたら、大体今16時に家を出るっていうのも逆に、まあ暗黙の了解じゃないかみたいになってて、誰か一人が「whoo」の中で出発してるなって感じたら、みんな出始めるとか。 (Aさん・21歳男性・使用継続中)

このように、位置情報を共有することで、集合時間を厳密に設定しなくても、相手の動きを見ながらタイミングを合わせている様子がわかる。相手の移動状況を把握し、暗黙の了解のもとで集合が可能になっている。また、「whoo」は相手の状況を確認する目的でも利用されていた。恋人が移動している際に、無事かどうかを確認するために開くという声が複数あった。

開くときは、例えば彼女がバイト先に歩いていってなった時、ちょっと距離があるんで、その時ちょっと心配だなと思う時ちょっと見て。

(Bさん・19歳男性・使用継続中)

この発言から、「whoo」が日常的な見守りの役割を果たしていることが分かる。

さらに、「whoo」は行動を起こすきっかけとして使われる場面もみられた。アプリを開いた際に、近くに友

人がいることに気づき、そこから連絡や会うきっかけに繋がる場面も語られた。

友達から通知とか飛んできたら、バーッと開いて、『近くいるじゃん。会おうよ』みたいな。

(Iさん・22歳女性・使用継続中)

一方で、場面に応じて位置情報のオン/オフを切り替えながら利用する一例もみられた。

サプライズとかの時は、あっ、付き合いたての時とか。オフにして大学まで迎えに行ってた！(笑う)

(Fさん・21歳女性・使用継続中)

*以下 () 内は筆者らによる補足

さらに、ほとんどの対象者は「whoo」のスタンプ機能を使った遊戯的なやり取りも楽しんでいた。

なんか。友達なんだけど、部活に同じ場所に行くってなって遅刻したときに、なんか、スタンプ送る機能あるよね？あれでスタ連ぶわわわわ！というノリはおもしろいかな。

(Gさん・21歳女性・使用継続中)

以上のように、「whoo」は待ち合わせや移動確認といった実用的な場面だけでなく、安心のための見守り、偶発的な合流、サプライズなど、日常生活のさまざまな場面で利用されていた。

5. 3 検証課題についての結果と考察

(1) プライバシー意識との関連

確かにプライバシー意識が低い者ほど位置情報の共有に抵抗がなく、「whoo」を日常的に利用する傾向が一部に見られた。しかし、利用者の中には、普段からオンラインでのユーザ登録では、実名確認が必要ない場合にはあえて別名を使うというようなプライバシー意識が高い者もいた。逆にプライバシー意識が低くても利用場面を限定する事例も確認された。したがって、プライバシー意識の高低だけで利用の仕方が変わるわけではなかった。

さすがに位置情報共有は超仲良い子としかやってなかったの。それが信頼の友達の証かなみたいな感覚でいれてたという感じかな。 (Dさん・20歳男性・使用中止)

このように、信頼できる友人や親しい関係者との間では、プライバシー意識の高さに関わらず位置情報を共有する傾向があり、共有相手を慎重に厳選する姿勢も見られた。位置情報の共有を認めることが信頼の表現にもなっていた。一方で、アプリ提供企業への情報提供への抵

抗感やデータ管理への懸念については、ほとんど言及されなかった。

このことから、「whoo」は共有相手が可視化された状態で日常的に利用されるアプリであるため、利用者の関心は身近な他者との関係性に向かいやすく、その背後にあるデータ管理や企業の関与は意識されにくい構造を持っていることが示唆される。

さらに、実際に位置情報がきっかけでトラブルが発生したにも関わらず、アプリそのものへの不信感には結びつかず、個人の性格や行動に原因が帰属されるという特徴的な事例も確認された。Fさんは、高校時代に「Zenly」を通じて自宅を特定され、複数の男子生徒に家を回られるという被害を受けた経験を語っている。

うちと友達3人が被害あって、(中略)うちとその3人の家を回ってたの。(中略)「Zenly」があったからバレた、家がバレて、その回ってるってこともバレて。

(Fさん・21歳女性・使用継続中)

位置情報を共有していなければ起こらなかった事件であり、学校で大きな問題となった出来事だという。しかし、Fさんは、その後もアプリを削除せず、現在も「whoo」の利用を継続している。

Q (インタビュー) : 「Zenly」の被害、「Zenly」があったからって思ってなかったのかな。

F : 思ってないね。そいつがキモいで終わった。確かに転換されてるよね。(Fさん・21歳女性・使用継続中)

たとえ被害が発生した場合でも、利用者はその原因をアプリ自体ではなく加害者個人の問題として捉えていた。ここでも利用の判断基準は、信頼できる相手との関係性によって支えられていることが分かる。

(2) 心理的な変化

調査の結果、位置情報共有アプリの利用は、ユーザーに対して「安心感」と「不安感」という、一見すると矛盾する二つの感情を同時に引き起こしていることが明らかになった。

「安心感」については、常につながっているという感覚に加え、物理的な距離が離れていても相手の状況が把握できることが、精神的な安定につながっている様子が見られた。この背景には、「Zenly」からの利用歴も影響していると推測される。長期間にわたって位置情報を共有してきたユーザーは、自身の居場所や日常を公開することに慣れており、この「慣れ」が安心感の土台になっていると考えられる。

Q : 結構もうお互いの行動めっちゃめっちゃ分かりきってる、共有しまくってるよね。

B : あ、もう。しまくってるんですけど、でもやっぱり遠距離なんで会わないんで。

Q : そっかあ、なるほどね。なんかちょっと近…しないよりは近づいてる感じが心の縮まってる感。

B : そうっすね、自分はまあ遠いんで、そういうところで逆に繋がってないと多分お互い不安になるのかなっていう。(Bさん・19歳男性・使用継続中)

しかし、同時に「監視されている」という感覚が強まると、その感情は明確な不快感へと変化していた。過度な閲覧や干渉を感じた際、安心感は容易に不安や嫌悪感へと変わることが分かった。

Q : 「whoo」を使うことでその人との関係に変化はありましたか？

C : 悪い意味ではあったかもしれないです。僕が冷めてしまう原因になったというか。

Q : それはその原因ってなんですかね？

C : やっぱり見られてる感、束縛されてる感もあるし、相手が「whoo」を見て、今家にいるでしょって。何してるの？みたいな連絡が来るんですよ。それによって、僕があんま相手のこと興味ないのにすごい追われてる感っていうか。すごい積極的に来られると逆に冷めてしまって。全部切りたい、関係性切りたいう原因になった。

(Cさん・20歳男性・現在は使用中)

以上のことから、位置情報共有アプリによる心理的な影響は一律ではなく、相手との距離感や干渉の度合いによって、安心にもなれば不快にもなるという不安定な側面があると言える。

友人同士の場合、もともとの仲がいい相手とのみ共有しているためか、協力者は総じて「whoo」によって関係性に大きな変化は見られないとしている。しかし、恋人関係の相手の場合は、位置情報を共有することで束縛感などが生じ、かえって関係が悪化してしまうケースが確認された。そして、このような関係性の悪化や心理的負担は、時には相手との関係の終了や、アプリの利用中止につながった。Cさんの場合、相手からの過度な干渉が冷めや関係を切りたいという感情を引き起こし、それが「whoo」をやめる直接的な原因となっている。

(3) 配慮の高度化

[荒井]が「Zenly」において指摘した、位置情報の常時共有によって生じる行動調整や状況に応じた配慮は、「whoo」の利用においても確認された。「whoo」は、単に相手の居場所を把握するためのツールとして

ではなく、相手の状況を推測し、それに応じて自身の行動やコミュニケーションを調整するための手がかりとして利用されていた。例えば、友人が大学に遅刻しそうな状況を位置情報から察知し、直接連絡を取る行動が語られている。

起きてる？ってLINEで電話します。起きてる？って。
(Bさん・19歳男性・使用継続中)

また、相手の移動状況を確認したうえで、自ら迎えに行くといった行動も見られた。Eさんは、位置情報を見て相手が遅れていると分かった際の行動について、次のように語っている。

家にいた時に(相手が)ちょっと遅れてるから、自分から迎えに行こうとか、最寄り駅に行ってあげようみたいなことはある。
(Eさん・22歳男性・使用継続中)

さらに、位置情報を通じて相手の行動を把握した結果、自分の予定を変更するという配慮も確認された。Gさんは、恋人の移動状況を見て、外出を控えた経験について、次のように語っている。

買い物行こうと思ってたんだけど、彼氏が「whoo」見たら家に(向かって)来てるのが分かって。家に近づいてきているのが分かったから、出かけるのやめておこう、みたいのはある。
(Gさん・21歳女性・使用継続中)

これらの発言から、「whoo」の利用者は、位置情報を通じて相手を直接管理するのではなく、相手の生活リズムや移動状況を手掛かりに、相手が何を望んでいるか、どのような状況にあるのかを先読みし、それに寄り添う形で行動を調整していることが分かる。位置情報は、相手の行動を制御するための情報ではなく、配慮に基づく判断を支える材料として機能していると考えられる。このように、「whoo」の利用は、明示的な依頼や言葉によるやり取りがなくても、共有相手の存在を常に意識させ、配慮を前提とした行動調整を促している。

(4) 利便性と娯楽性のバランス

本研究では最初、位置情報共有アプリの利用目的について、日常生活の効率化や安心感を求める利便性重視と、友人との会話のきっかけや観察を楽しむ娯楽性重視の二つのタイプに利用者が分かれるのではないかと予想していた。しかし結果として、娯楽のみを主目的としている協力者は見られなかった。娯楽としての利用を挙げる者でも、実際には利便性の部分も重視していた。また周囲が使っているからという環境的な要因で利用することが多く、純粋に楽しみだけを求めて利用し続けている例

は確認されなかった。友人関係においては、待ち合わせ時の連絡の手間を省くといった利便性や、暇つぶしとして今どこにいるかを確認しコミュニケーションのきっかけや話題作りが中心となっていた。

Q: じゃあ、誰かの行動を見て、動きとかを見て、友達とかと話題にしたことはありますか。

F: 全然あると思う。あの子、ディズニー行ってたねとか。マジ全然あると思う。

(Fさん・21歳女性・使用継続中)

恋人関係においては、言っていた通りの場所にいるかという事実確認や、「怪しいことはない」と確認することで不安を解消しようとするのが利用動機となっている場合も多かった。

Q: じゃあ「whoo」を使うことで安心したり不安になったりしたことはありますか？

G: あ、ありますね。なんか、連絡もなしに、彼氏がどっか行ってたらえ、なんで？みたいになる。

Q: 連絡来てないのに「whoo」はどっか行ったからみたいなの。

G: そうそう。学校とかバイトとか以外の場所にいるってなると、え？ってなる。(笑)

Q: そうだね。逆に安心したことってある？

G: あー安心。でもなんか、だれだれと遊びに行くここに行くって言われてちゃんとそこにいたときはあー(安堵)ってなる。(Gさん・21歳女性・使用継続中)

以上のことから、大学生にとって娯楽性はあくまで友人関係における「おまけ」のようなものであり、それだけでアプリを使う理由にはなりにくいと言える。位置情報共有アプリは、単なる遊び道具ではなく、相手との関係に合わせて連絡を効率よく行うことや、精神的な安定を得るための手段として使われていると考えられる。

(5) 個人の性格特性との関連

インタビューの結果、新しいもの好きであると自認している対象者は複数いたものの、それが「whoo」を利用し始めた直接の理由になっているわけではなかった。実際の利用開始の理由としては、友人から勧められたことや、周囲の友人が既に利用していたことが挙げられ、対象者自身から他者に勧めたり、自発的に利用を開始したりした例は今回は確認されなかった。

また当初は個人の承認欲求の強さが利用スタイルに影響を与えるという仮説を立てていた。具体的には、承認欲求が強いユーザーほど、自身の行動や存在が友人に認知されることに楽しさを見出すため、リアルタイムでの位置共有に加え、閲覧数やランキング、滞在時間表示な

どの機能を頻繁に利用すると予想した。対照的に、承認欲求が弱いユーザーは、位置情報を共有すること自体から得られる満足感が少ないため、利用は必要最低限にとどまると想定していた。しかし限られたインタビューの対話の範囲で協力者の承認欲求の強さを測定・分類することが難しく、今回の方法では承認欲求と利用行動の間に明確な関係を見つけることができなかった。

5. 4 その他の知見

(1) 恋人と友人の違い

改めて確認できた知見として、位置情報共有アプリの利用動機と利用実態は、共有する相手が「友人」か「恋人」かによって明確に異なるという点が挙げられる。

まず、友人関係における利用動機は、主に待ち合わせ時の利便性や、「今どこにいるのか」をなんとなく確認するといった「暇つぶし」が中心となっている。位置情報は会話や連絡のきっかけとして、あるいは合流を円滑にするための補助的なツールとして機能しており、そこに強い監視性や義務感は見られなかった。

Q：今後も「whoo」を使いたいと思いますか？

A：いやあ。(悩む) あれば使いたいと思います。

Q：なぜですか？

A：待ち合わせとかに便利だから。駅に友達がいるなど思ったら連絡とかできるから。しやすいから。

(Aさん・21歳男性・使用継続中)

また共有相手と一緒にいた滞在時間が記録され、多い順に示されるランキング機能については、過去の出来事を振り返る手がかりとなるアーカイブとして楽しまれていた。

H：便利？あーでもなんかちょっと思い出になるっていうので一緒にいた時間が見れるやつ。

Q：うんうんうん。

H：それが面白い。(「whoo」を開いてランキングを見る) あ、この人とこだけ一緒にいたんだって。見れるところ。

Q：1位の人はR (共通の知人)？

H：違う。これは留学中一緒に部屋だった人。

Q：あー。

H：それを見て、留学中一緒に部屋だったなって思い出す。

(Hさん・20歳男性・使用継続中)

一方で、恋人関係における利用動機は大きく異なる。多くの対象者が恋人との共有理由として「安心感」を挙げているが、その内容は単なる利便性を超え、相手の身の安全や行動の事実確認に重きが置かれている。まず、

純粋な「見守り」としての側面である。相手の帰宅状況を確認することで、無事に帰れているかという安否を気遣い、安心感を得ているケースが複数見られた。

安心したこと？…ちゃんと帰ってること！終電過ぎたらお父さんに迎えに来てもらってちゃんと高速道路を走ってたことも。よかったなって思いました。

(Hさん・20歳男性・使用継続中)

Jさんも同様に、飲み会後の帰宅確認など、相手の安全を確認できることが安心に繋がると述べている。

彼氏が飲みの帰りに家に帰っていたら安心する。

(Jさん・22歳女性・使用継続中)

しかし、位置情報による可視化は「安心」をもたらず一方で、相手からの言葉(連絡)とアプリ上の位置に不一致が生じた際、強い「不安」を引き起こす要因ともなっている。例えば、Fさんは普段はあるはずの連絡がない状態で位置情報が移動しているのを見て不安を感じたと語り、Jさんはアプリの不具合で位置情報が更新されなかった際に、相手の言葉よりもアプリの情報を信じて喧嘩に発展した経験を挙げている。

F：不安は、昨日もあの、今の彼氏って絶対報連相するんでめっちゃ。今から帰るよって絶対言うんだけど。絶対、だいたい17時過ぎに今から帰るよって連絡来るのに、昨日来なくて、見たの。位置。そしたら帰ってんの。移動してんの。

Q：あら、いつも帰るよってLINEが来るのに来ない。

(Fさん・21歳女性・使用継続中)

J：1回、同期と飲み会があるって聞いてて、しかも帰るって聞いてたのね。なのに全然帰ってないから喧嘩になったことある(笑)

Q：え(笑) 彼氏が嘘ついてたってこと？

J：いや、なんかバグだったっぽい。

Q：あー。

J：お店が電波が弱くて変になってたのかもって言って、それも言い訳でしょ！ってなったけどテレビ電話して家だよーって(笑)

(Jさん・22歳女性・使用継続中)

このような「安心」と「不安」が入り混じった実態からは、恋人同士の「信頼」の形が変化してきていることが分かる。Gさんの先に引用した発言は、この心理をよく表している。

だれだれと遊びに行くここに行くって言われてちゃんとそこにいたときはあー(安堵)ってる。

(Gさん・21歳女性・使用継続中)

この「ちゃんとそこにいた時は安心する」という発言は、裏を返せば、相手の言葉だけでは安心が完了しておらず、アプリで「位置情報」を確認して初めて信頼できていることを表している。つまり、「whoo」によって得られる「安心」とは、純粋に見守りや安全確認のためだけでなく、「位置情報という客観的な証拠」によって相手の言動が真実であると検証できた時に得られると言える。「whoo」は「離れていても繋がれる安心感」を提供する一方で、「位置情報という裏付けがないと、相手の言葉を信じきれない」という新たな不安を生み出しており、結果として言葉によるコミュニケーションへの信頼度を下げている可能性がある。

(2) 「見る側」と「見られる側」における非対称性

本調査を通じて明らかになった二つ目の知見は、位置情報共有アプリの利用が、利用者の無意識的な行動変化を引き起こしている点である。インタビューでは、位置情報を見て連絡や行動を変えた経験についての質問で多くの対象者が、「変えていない」と答えていた。例えば、ある対象者は、明確に行動変化を否定していた。

Q：「whoo」を使うことで自分の行動・出かけ方とかで連絡のタイミングとか予定の立て方などで変化したことはありましたか？

I：(5秒沈黙) ない。ごめん(笑)

(Iさん・22歳女性・使用継続中)

しかし、具体的なエピソードを掘り下げて聞き取ると、本人の自覚とは異なり、相手の位置情報を見て行動を微調整している事例が複数確認された。同じ対象者は、「ない。」と述べながらも、「whoo」を開いた際に近くに友人がいることに気づき、そのまま合流して一緒に帰宅したという経験を語った。

地元の子とかだったら、パッと開いた時に近くにいたら「一緒に帰ろうよ」とかはやってた。

(Iさん・22歳女性・使用継続中)

本人は「意識的に行動を変えた」とは捉えていなかったが、位置情報共有が行動の変化をもたらしていたことを示す例である。

このような無意識の行動変容が生じる背景には、「whoo」のアーキテクチャが大きく影響していると考えられる。先行研究で述べたように、アーキテクチャは、サービスの設計そのものによってユーザーの行動を誘導

する力を持つ([濱野])。「whoo」は、アプリを開けば即座に相手の位置が視覚的に把握でき、地図上で相手の動きはリアルタイムで更新される設計になっている。このため、ユーザーは「見て行動を決めよう」と意識しなくても、アプリを開けば相手の位置を自然と目にする。結果として、位置情報を見たことが相手の置かれた状況の判断に繋がり、その判断が行動の変化へと結びつくという一連の流れが、利用者に対する強制や命令がなくても成立すると考えられる。

一方で、位置情報を見られているからこそ、行動を変えた経験についての質問では、対象者が自覚的に行動を調整していた事例が多く確認された。ある対象者は、恋人と位置情報を共有している状況を踏まえ、相手が不快に感じる可能性を考慮して行動を変更した経験を語っている。

東京に行ったときに、興味本位でト一横を見てみたいと思っただけであつたんですけど、(中略) そういうところに行くと、多分彼女は嫌がるかなと思って、行くのをやめました。

(Bさん・19歳男性・使用継続中)

この発言からは、「見られている」ことを前提に、共有相手の感情や評価を想定しながら、自分の行動を意図的に調整していることが分かる。

これらの結果から、位置情報共有アプリの利用においては、「見る側」と「見られる側」とで、行動変容の自覚のされ方が異なる可能性が考えられる。

(3) 監視の文化

本研究を通じて確認された「whoo」の利用実態は、現代社会において「監視」の概念が大きく変容していることを示している。かつて、監視といえば、パノプティコンのモデルのように、国家や企業といった特定の権力者が市民を一方向的に管理する「上からの監視」を指すのが一般的であった。そこでは、囚人からは、看守の存在が見えないようになっている塔からの視線を意識させることで、人々を規律に従わせていた。しかし、現代の監視はこのような構造ではなくなってきた。ライアン(2018=2019)が指摘したように、監視はもはや特殊な施設に限られた行為ではなく、普通の人々がスマートフォンやSNSといった日常的なツールを通じて、生活の中で絶えず生成し合うものへと変化している。

「whoo」の利用はまさにこの「監視文化」への変化を表している。ユーザーは権力に強制されるのではなく、利便性や安心感を得るための対価として、自ら進んで位置情報というデータを提供し、受け取っている。これは、権力者による一方向的な管理ではなく、一般市民同士が互いの行動を可視化し合う「相互監視」が成立していることを意味する。以下のJさんの発言は、監視(見る・

見られること)が日常のルーティンとして溶け込んでいる様子を示している。

Q：え、で、起きたら見るの？

J：うん。もう仕事行ってる時間だけど、「whoo」見て、あ、もう着いてる、とか。

Q：うんうんうん。

J：ちょっと早く見た時は、移動してる、とか。確認してる。

Q：へー。

J：だからまず起きたら見てますね。

(Jさん・22歳女性・使用継続中)

さらに、この相互監視の環境は、単に見るだけでなく、見られることを意識した「行動の変容」も引き起こしている。以下のエピソードは「whoo」の中の滞在時間をリセットするためだけに、自分の部屋から玄関までわざわざ移動を行っており、アプリ上の視線を意識して行動を調整している。

J：ずっと家にいると、彼氏が僕は仕事頑張ってるのにJちゃんはまた引きこもってえ、って拗ねるから外に出る。

Q：(笑)どこ行くの？(笑)

J：え、玄関ちょっと出るだけ。

Q：え？

J：なんかさ、ちょっと動いただけで移動判定、というか時間変わる、くない？

Q：あー滞在時間が。それで言われるのか。

J：そうそうそう。なんかね、3日間ってなった時があって拗ねられた。

Q：おもしろ(笑)それはさ、めんどくさいなって思わないの？「whoo」なかったら言われなくない？

J：うーん、遠距離だからどうせ今日はなにしてたの、とか聞かれるんだけどね。

(Jさん・22歳女性・使用継続中)

アプリを開けば友人の居場所が分かり、同時に自分の居場所も見られているという状況は、パノプティコン的な不可視の視線が友人や恋人間に存在しているのと同じである。この見られているかもしれないという感覚が、現代においては恐怖による支配ではなく、相手への高度な配慮や行動の微調整という新たな規律を生み出している。

6. まとめ

大学生による位置情報共有アプリ「whoo」の利用を検討した本研究は、監視が日常の一部となった現代社会において、利用者がどのように信頼関係や安心感を基盤に位置情報共有を受け入れているのかを明らかにした。

分析の結果、利用者は共有相手を厳選することで安心感を得ており、友人関係や恋人関係においてそれぞれ異なる形で肯定的に位置情報を活用していた。

さらに、利用者は「whoo」のアーキテクチャによって行動を調整しているという自覚をほとんど持っていなかった。位置情報を通じて相手の状況を瞬時に把握し、連絡のタイミングを調整したり、待ち合わせの手間を省略したりする行動は、本人にとっては自然な判断として語られた。しかし、その一方で、「見られる側」であることを意識し、行動を整える場面も存在していた。これは、常時共有という環境が、利用者にも無自覚な行動調整だけでなく、状況に応じた行動の選択を促していることを示している。

このように、「whoo」は監視社会的な要素をきめ細かく強化するSNSでありながら、利用者はそれを否定的に捉えていない。むしろ、信頼関係の確認、安心感の獲得、コミュニケーションの効率化といった肯定的な価値を見出し、日常生活の中で柔軟に受け入れていた。監視が日常化した環境において、位置情報共有は単なる監視のためのツールではなく、関係性を支えるためのツールとして用いられていることが明らかになった。

なお、本研究の限界として、対象者の選定が挙げられる。今回の研究では、大学生の筆者ら二人の個人的なネットワークを中心として協力者を募ったため、多くが筆者らと同一の大学に所属する学生であった。本来、大学生といっても多様な生活実態、価値観があるはずだが、今回は「自分たちと似た感覚を持つグループ」の意見が中心になってしまった可能性がある。また、本研究では、対象を「大学生」のみに絞っており、高校生や社会人といった他の立場の人たちへの調査はできていない。もし、対象者の年齢や立場が変われば、結果は大きく違っていたと考えられる。年齢や環境が変わるにつれて、位置情報の共有がどのように受け入れられ、変化していくのかをより深く理解できると思われる。また今回はインタビュー調査のみだったため個人の性格特性等を正確に把握することが難しかった。今後はインタビュー技術の向上に努めるとともに、心理尺度などの量的な調査も交えて多面的に検証することが必要と考えられる。

謝辞：

本研究を進めるにあたって、インタビューに協力してくださった皆さまに心よりお礼申し上げます。

注：

(注1) 北九州母娘刺傷事件(神戸新聞NEXT, 2022)
<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/omoshiro/202208/0015560274.shtml> (最終確認日 2026/01/21)

- (注 2) 子ども見守り GPS 悪用ストーカー事件 (産経新聞, 2025)
<https://www.sankei.com/article/20250605-DSFCAYXZCVPUJBOHPQ3O2UOPBY/> (最終確認日 2026/01/21)
- (注 3) 位置情報アプリ「whoo」, 累計 3,000 万 DL 突破! 人気動画クリエイターが記念コメント 2025 年 9 月 17 日 (PR TIMES による) (株) LinQ のプレスリリース
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000014.000116699.html> (最終確認日 2026/01/21)
- (注 4) 位置情報の公開を柔軟にコントロールできる機能。「フリーズモード」を使えば, 実際には移動していてもマップ上ではフリーズ設定前の最後の位置から動かなくなる。ただし相手に使用について気づかれる場合も多く, そのこと自体が逆に不信感を招くこともある。

引用文献:

- 荒井悠介 2023 位置情報の常時共有と配慮の高度化: Zenly ユーザーの大学生を事例に 一橋研究, 48 (1), 23-32
- フーコー, ミシェル 1975=1977 監獄の誕生—監視と処罰— (田村俣訳) 新潮社
- 濱野智史 2008 アーキテクチャの生態系—情報環境はいかに設計されてきたか NTT出版
- ライアン, デイヴィット 2018=2019 監視文化の誕生—社会に監視される時代からひとびとが進んで監視する時代へ (田畑暁生訳) 青土社
- 佐藤広英・太幡直也 2016 情報プライバシーに基づく SNS 利用者の類型化: プライバシーに関わる被害経験および自己情報公開に対するリスク 認知との関連 メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 15-26
- 渡邊菜保子 2017 青年期の SNS 利用における自己開示とその心理的要因 東京国際大学 臨床心理学研究, 15, 79-95